

# 比恵遺跡群(14)

—比恵遺跡群第47次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第369集

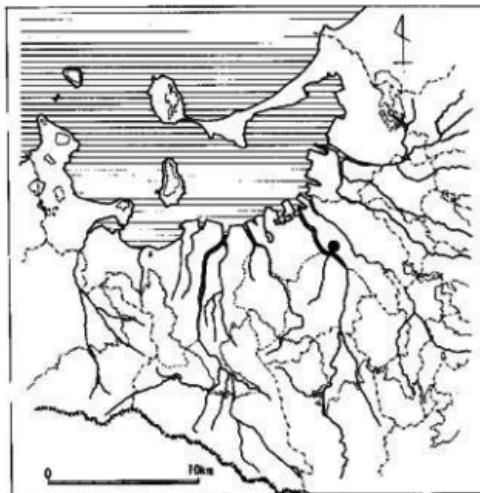
1994

福岡市教育委員会

# 比恵遺跡群(14)

—比恵遺跡群第47次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第369集



遺跡略号 HIE-47  
遺跡調査番号9245

1994

福岡市教育委員会

## 序

福岡市の陸の玄関である博多駅の南側には古くから大陸文化流入の先進地として栄えた「奴国」の拠点地域とされる遺跡群が広がっています。今回報告する比恵遺跡はその内の代表的な遺跡であり、近年の再開発に伴い現在までに50次を越える発掘調査が行われ調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は店舗兼個人専用住宅の建て替えに伴って実施された第47次調査を報告するものです。第47次調査は那の津官家推定地とされる第8次調査地点の南側にあたり、限られた範囲での調査でしたが、調査の結果、古墳時代の遺構、東側で台地の落ち際、谷部が検出されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた生田俊明氏を始めとする多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

## 例　言

1. 本書は福岡市博多区博多駅南五丁目における店舗兼個人専用住宅の建て替えに伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成4（1992）年に国庫補助を得て発掘調査を実施した比恵遺跡群第47次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測・撮影は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎が行った。
3. 本書に掲載した遺物の内、土器の実測・撮影を佐藤、石器の実測は大庭友子、撮影は二宮忠司（福岡市埋蔵文化財センター）があたった。
4. 製図は遺構を藤村佳公忠、遺物の内、土器を佐藤、石器は大庭が行った。
5. 本書の執筆はIV-2の石器の項を大庭が、他は佐藤が行った。
6. 本書の編集は佐藤が行った。
7. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

## 目 次

### 序

I	はじめに	1
1	調査に到る経過	1
2	調査の組織	1
II	遺跡の位置と環境	4
III	発掘調査の概要	5
IV	遺構と遺物	7
1	検出遺構	7
	上塙	7
2	出土遺物	7

## 挿図目次

第1図	比恵遺跡群と周辺の遺跡	2
第2図	比恵遺跡群調査地点位置図	3
第3図	比恵遺跡群第47次調査周辺位置図	4
第4図	比恵遺跡群第47次調査遺構配置図	5
第5図	土壤実測図(1)	6
第6図	土壤実測図(2)	7
第7図	出土土器実測図	8
第8図	出土石器実測図(1)	9
第9図	出土石器実測図(2)	10

## 図版目次

- 図版 1 1. 比恵遺跡群第47次調査区東側（東から）  
2. 比恵遺跡群第47次調査区東側（西から）
- 図版 2 1. 比恵遺跡群第47次調査区西側（東から）  
2. 比恵遺跡群第47次調査区北西部分（東から）
- 図版 3 1. SK02土壤土層（西から） 2. SK02土壤（西から）
- 図版 4 1. SK01土壤土層（西から） 2. SK01土壤（西から）
- 図版 5 1. SK03土壤土器出土状況（南から） 2. 出出土器
- 図版 6 出土石器

## I はじめに

### 1 調査に到る経過

1992年4月2日、生田俊明氏から本市に対して博多区博多駅南5丁目11における店舗兼自宅建て替えに伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの比恵遺跡群の西側に位置し、申請地北西隣接地は第8次調査地が位置している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1992年9月24日に試掘調査を実施した結果、南西側は客土下で地山のローム層、北東側ではローム層が緩やかに下降し黒色の遺物包含層が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積182m<sup>2</sup>を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。生田俊明氏と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年11月4日から11月30日まで行われた。

### 2 調査の組織

調査委託 生田俊明

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 折尾 学

第2係長 塙屋勝利（前任） 第2係長 山崎純男

庶務担当 吉田麻由美

調査担当 試掘調査 荒牧宏行

発掘調査 佐藤一郎

発掘作業・資料整理協力者 蒲地雅徳・閔 義種・田出橋和男・内山和子・奥田弘子・久良木

シズエ・舍川キチエ・広川道枝・本河富枝・村上エミカ・村上エミ子・相川和子・

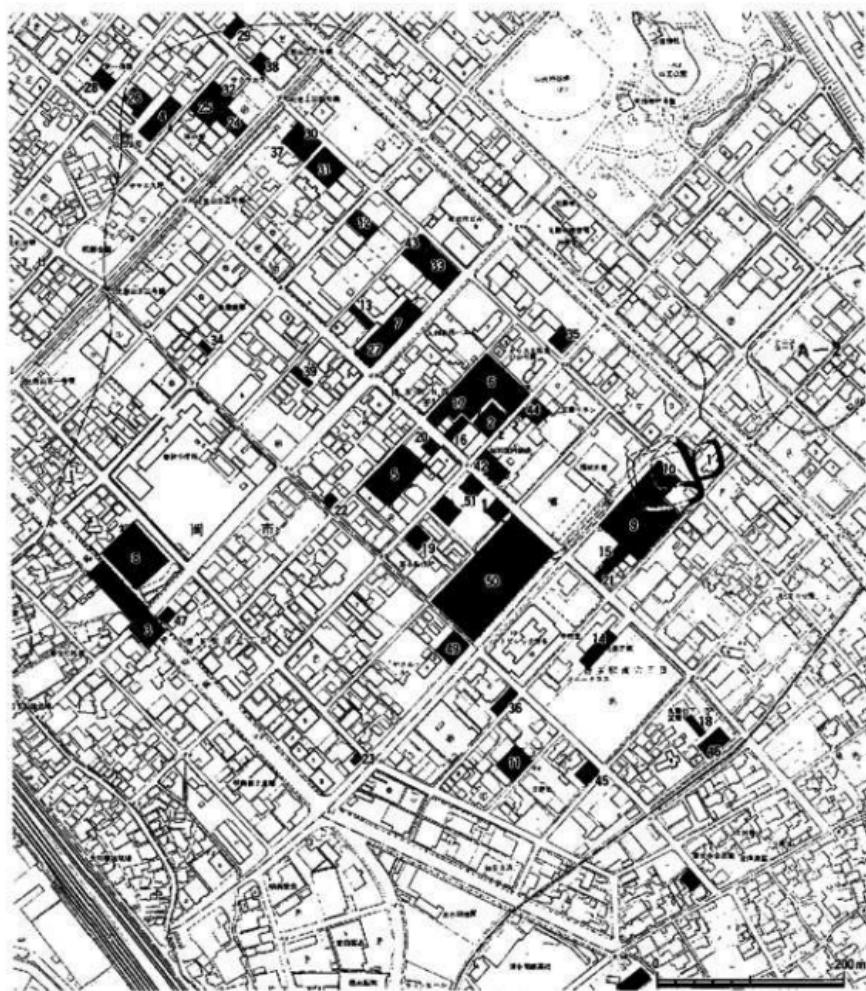
下河純子・田中ヤス子・藤野邦子・藤村佳公忠・星子輝美

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の生田俊明氏、施工の株式会社奥村組をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進み無事終了することができました。ここに深く感謝します。



- |            |                   |             |             |
|------------|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 博多遺跡群   | 5. 比恵遺跡群          | 12. 五十川高木遺跡 | 17. 須佐同本遺跡  |
| 2. 稲四輪     | 7. 鶴河遺跡群          | 13. 井尻遺跡群   | 18. 須佐四丁目遺跡 |
| 3. 稲船遺跡群   | 8. 那珂泥ラサ遺跡、那珂君休遺跡 | 14. 日佐遺跡群   | 19. 赤井手遺跡   |
| 4. 吉塙本町遺跡群 | 9. 佐付遺跡           | 15. 須佐集落遺跡  | 20. 三宅南寺    |
| 5. 吉塙遺跡群   | 10. 鮎岡遺跡          | 16. 滝久永田遺跡  | 21. 野多目遺跡   |
|            | 11. 雀居遺跡          |             | 22. 野多目祐遺跡  |

第1図 比恵遺跡群と周辺の遺跡

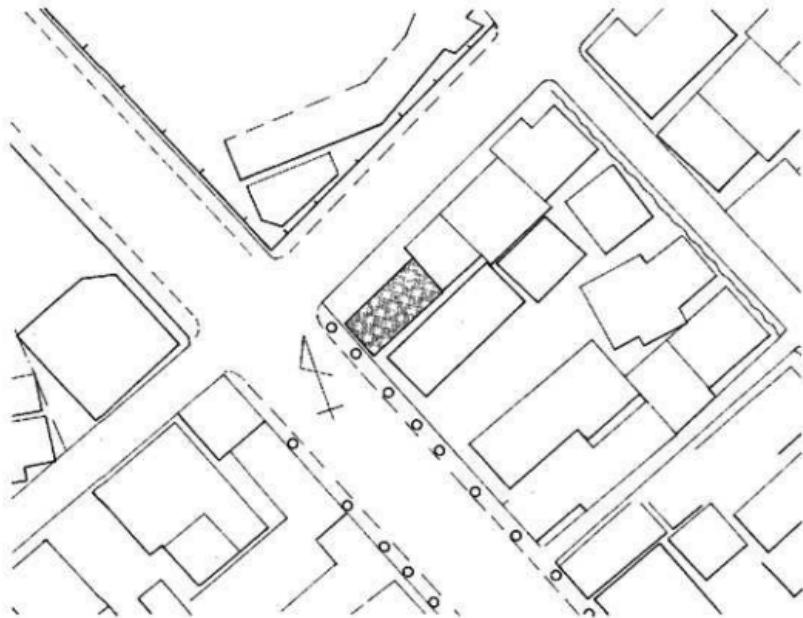


- 比惠通跡群  
 1. 第1次調査地点 2. 第2次調査地点 3. 第3次調査地点 4. 第4次調査地点 5. 第5次調査地点  
 6. 第6次調査地点 7. 第7次調査地点 8. 第8次調査地点 9. 第9次調査地点 10. 第10次調査地点  
 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 13. 第13次調査地点 14. 第14次調査地点 15. 第15次調査地点  
 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点 18. 第18次調査地点 19. 第19次調査地点 20. 第20次調査地点  
 21. 第21次調査地点 22. 第22次調査地点 23. 第23次調査地点 24. 第24次調査地点 25. 第25次調査地点  
 26. 第26次調査地点 27. 第27次調査地点 28. 第28次調査地点 29. 第29次調査地点 30. 第30次調査地点  
 31. 第31次調査地点 32. 第32次調査地点 33. 第33次調査地点 34. 第34次調査地点 35. 第35次調査地点  
 36. 第36次調査地点 37. 第37次調査地点 38. 第38次調査地点 39. 第39次調査地点 40. 第40次調査地点  
 41. 第41次調査地点 42. 第42次調査地点 43. 第43次調査地点 44. 第44次調査地点 45. 第45次調査地点  
 46. 第46次調査地点 47. 第47次調査地点 48. 第48次調査地点 49. 第49次調査地点 50. 第50次調査地点  
 51. 第51次調査地点

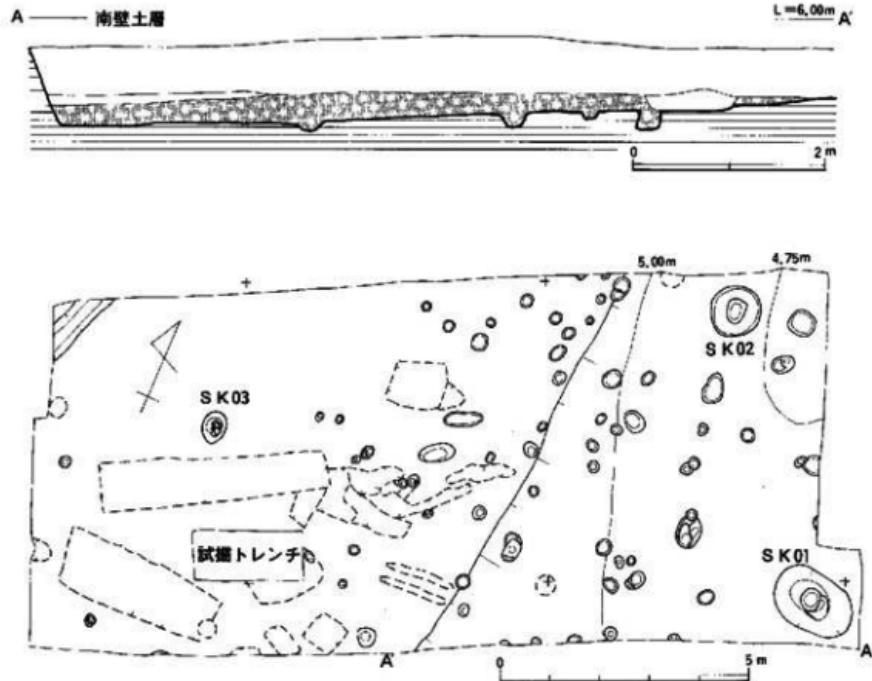
第2図 比惠通跡群調査地点位置図

## II 遺跡の位置と環境

比恵遺跡群は、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の最北端に立地する。現在は市街化が進み、1930年代から行われた区画整理のため地表からは平坦な地形のみしか窺い知ることができないが、現在までの発掘調査の成果から以前は多くの開析谷が入り込んでいたことが判明している。比恵遺跡群は地形的に北・西・中央の3つの台地に区分され、今回報告する第47次調査区は西台地の第3次調査区の東側に隣接し、道路を挟んで北西側に第8次調査区が位置する。第8次調査区、北東約400mの第7・13次調査区、約300mの第39次調査区では、6世紀後半から7世紀前半にかけての大規模な掘立柱建物（倉庫）群、棚列が検出されている。それらは規模・配置から官衙的な性格をもつと考えられ、歴史地理的な見地から大宰府の前身であるところの「那津官家」関連の施設と推定されている。以後、官衙的造構は南側の那珂遺跡群でみられるようになり、8世紀以降となると比恵遺跡群で検出される造構の数は激減する。



第3図 比恵遺跡群第47次調査周辺位置図

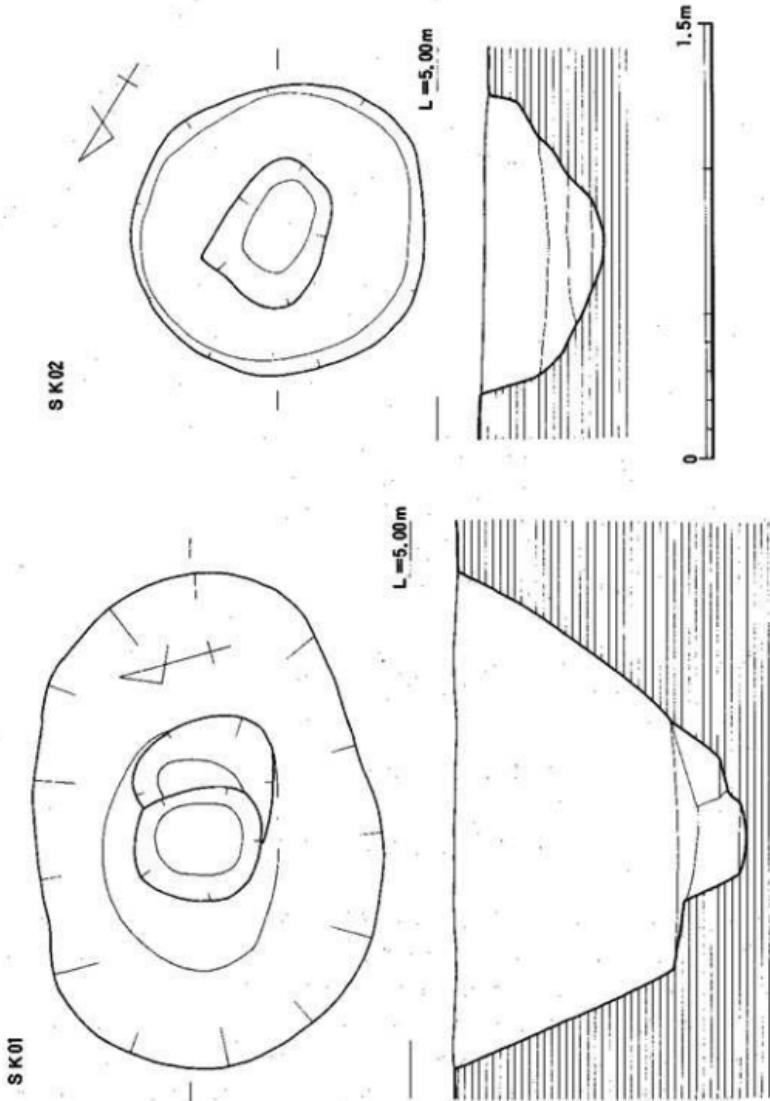


第4図 比恵遺跡群第47次調査遺構配置図

### III 発掘調査の概要

調査は1992年11月9日にバックホーによる表土剥ぎから始まった。現況は木造家屋解体後、更地となっている。真砂、客土下に一部旧耕作土がみられ、南西側ではその下面で地山の明黄褐色ロームがあらわれ北東側では緩やかに下降し、黒色の遺物包含層の堆積がみられた。南西側は後世の水田開墾や家屋解体による削平、擾乱をかなり受けしており、遺構の残りは良くない。休憩のためのユニットハウス設営部分を残し、遺構の検出にかかった。検出された遺構は4世紀前半から6世紀にかけての土壙、ピットで、11月21日に全体、個別の写真撮影、遺構実測、周辺の地形測量を行い、11月24日に残りのユニットハウス設営部分の表土剥ぎを行ったが、遺構は全くみられなかった。11月25日には機材を撤収し、調査は終了した。

第5図 土壌実測図(1)



## IV 遺構と遺物

SK03

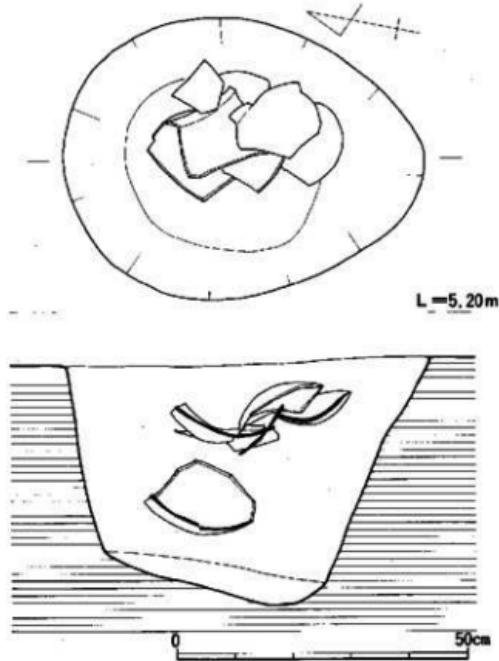
### 1 検出遺構

#### 土壤

SK01 (第5図、図版4) 調査区の北端で検出した平面形が不整円形を呈する土壤である。直径100cm、深さ40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

SK02 (第5図、図版3) 調査区の東端で検出した平面形が不整橢円形を呈する土壤である。全長170cm、幅120cm、深さ100cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

SK03 (第6図、図版5) 調査区の西側で検出した平面形が不整橢円形を呈する土壤である。全長60cm、幅50cm、深さ40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。土師器壺、杯、高杯片が底面から10~30cm浮いた状態で出土した。



第6図 土壤実測図(2)

### 2 出土遺物

#### SK01 出土土器 (第7図、図版5)

土師器 壺 (1) ほほ球形の胴部に外反して開く「く」字形に屈曲する口縁部がつく。屈曲部はやや肥厚し、口縁端部は細くおさめられている。調整は口縁部が内外とも横ナデ、胴部外面が縱方向の刷毛目、内面は口縁部近くが横方向、それより下位が斜め方向のヘラ削りが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

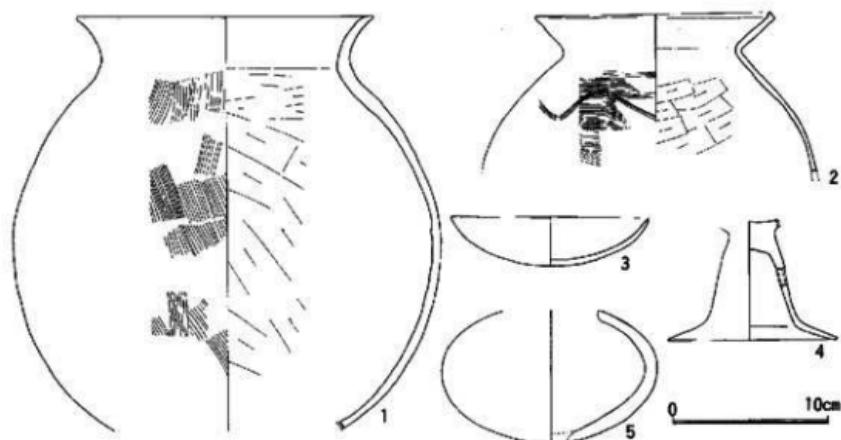
#### SK02 出土土器 (第7図、図版5)

土師器 (5) 編球形の胴部片のみ残存。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

#### SK03 出土土器 (第7図、図版5)

#### 土師器

壺 (2) 口縁部から胴部上半にかけて接合・復元され、同一個体とみられる底部片が同じ

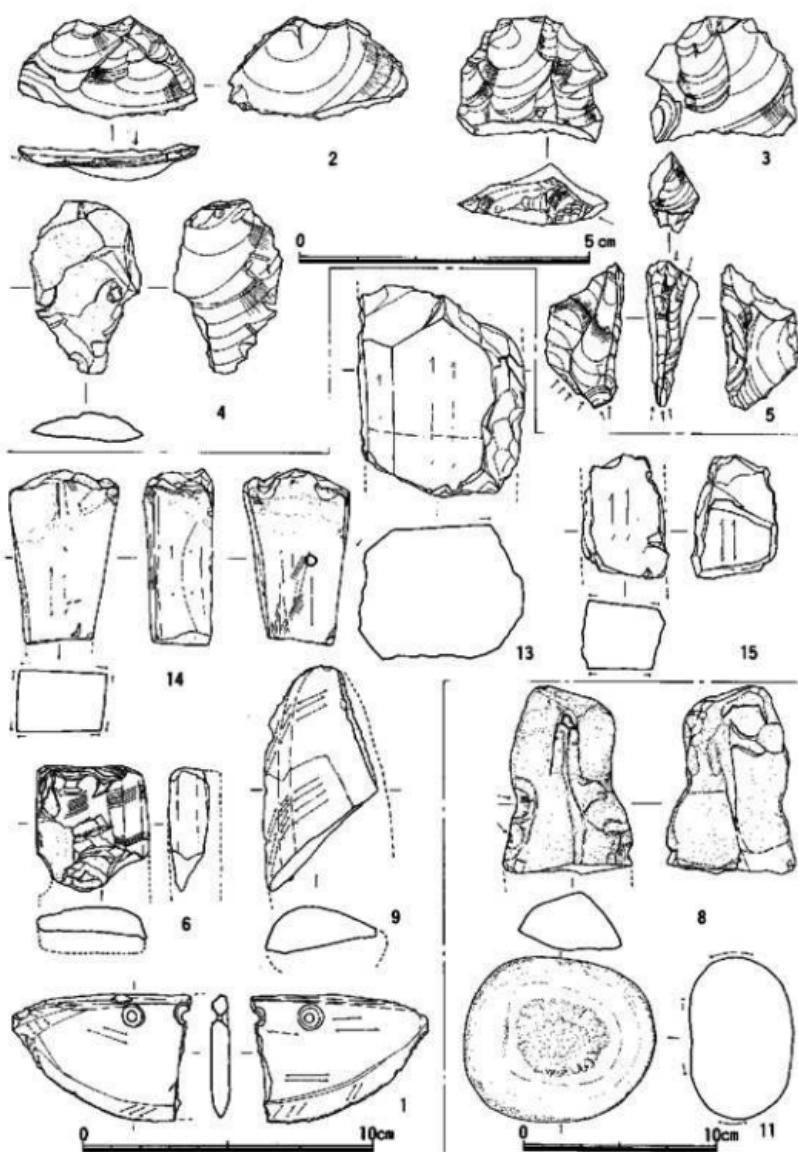


第7図 出土土器実測図

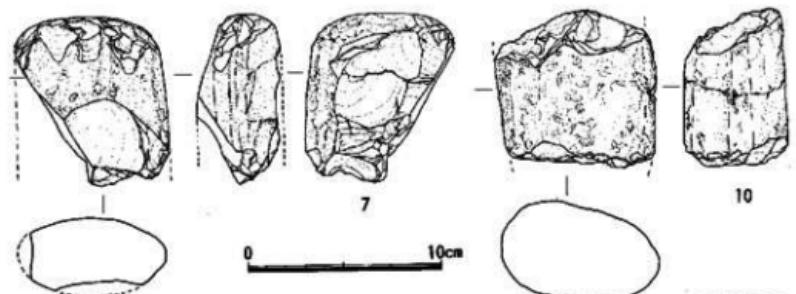
土壤内から出土しているが、接合不可能であった。口縁部はやや内湾しつつも直線的にのび、端部は鋭く突出されている。調整は口縁部が内外とも横ナデ、胴部上半の外面が横方向の刷毛目、肩部には波状の沈線、内面は横方向のヘラ削りが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

鉢（3） 口径（復元）12.8cm、器高2.4cmを測る丸底の鉢で、口縁部は細くおさめられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、明橙色を呈する。

高杯（4） 杯部は欠尖し、脚部は据近くで大きく開く。脚部の中位に2ヶ所円孔を焼成前に穿孔している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、明橙色を呈する。



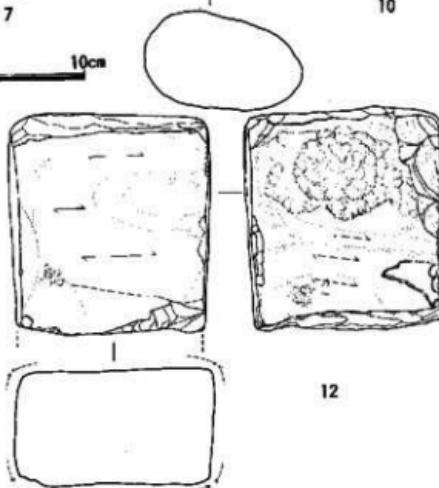
第8図 出土石器実測図(1)



石器（第8・9図、図版6）

石器は、18点出土した。その内15点を図示した。すべてSK01出土。

1は凝灰岩製の石臼である。半割りされているが、全面に丁寧な研磨を施し仕上げている。2・3は、黒耀石製の切断剝片である。4は、黒耀石製の縦長剝片である。5は、残核か彫器と考えられる。下端の剥離に継長のスパール状剝離が認められ、周辺に細かな剝離が認められる。黒耀石製。6は頁岩製の柱状抉入片刃石斧である。7は、遺存状態は悪いが玄武岩製石斧である。敲打による整形が進み、研磨直前の段階である。下面・側面の一部と刃部は欠損する。8は、凝灰岩製の磨石か石錘であろう。左右両部分に使用による研磨痕・削痕が観察され、石錘の可能性が高い。9から11は、磨石である。9は、凝灰岩の長梢円形を呈する磨石である。欠損部分が多いため全体の形状は不明、全体に研磨されている。10は、花崗岩製の磨石か石斧である。形態的には、上・下端を欠損していることと、石材が石斧には適さない花崗岩を使用していることから、一応、磨石としておく。全面に敲打痕を残し、断面は片側が若干厚い楕円形を呈する。11は、凝灰岩製の磨石（叩き石）である。上面中央部に浅い凹みを持ち、側辺部全体に使用痕がある。断面は楕円形を呈し、全体的に使用頻度が高い。12から15は砥石である。12は、凝灰岩製の大型砥石で四面の使用面を有する。上面は下面より砂質が少なくて軟らかで使用頻度も高い。断面四角形を呈する。13は、砂岩製で粒子が荒いため荒研用砥石と考えられ、使用面2面を有する。14は、硬質砂岩製の粘着のある石材を使用していることから仕上げ用砥石である。四面の使用を有し、断面形は四角形。15は、桂化木を石材とした砥石で、上下2面の使用が認められる。



第9図 出土石器実測図（2）

石器は、18点出土した。その内15点を図示した。すべてSK01出土。

1は凝灰岩製の石臼である。半割りされているが、全面に丁寧な研磨を施し仕上げている。2・3は、黒耀石製の切断剝片である。4は、黒耀石製の縦長剝片である。5は、残核か彫器と考えられる。下端の剥離に継長のスパール状剝離が認められ、周辺に細かな剝離が認められる。黒耀石製。6は頁岩製の柱状抉入片刃石斧である。7は、遺存状態は悪いが玄武岩製石斧である。敲打による整形が進み、研磨直前の段階である。下面・側面の一部と刃部は欠損する。8は、凝灰岩製の磨石か石錘であろう。左右両部分に使用による研磨痕・削痕が観察され、石錘の可能性が高い。9から11は、磨石である。9は、凝灰岩の長梢円形を呈する磨石である。欠損部分が多いため全体の形状は不明、全体に研磨されている。10は、花崗岩製の磨石か石斧である。形態的には、上・下端を欠損していることと、石材が石斧には適さない花崗岩を使用していることから、一応、磨石としておく。全面に敲打痕を残し、断面は片側が若干厚い楕円形を呈する。11は、凝灰岩製の磨石（叩き石）である。上面中央部に浅い凹みを持ち、側辺部全体に使用痕がある。断面は楕円形を呈し、全体的に使用頻度が高い。12から15は砥石である。12は、凝灰岩製の大型砥石で四面の使用面を有する。上面は下面より砂質が少なくて軟らかで使用頻度も高い。断面四角形を呈する。13は、砂岩製で粒子が荒いため荒研用砥石と考えられ、使用面2面を有する。14は、硬質砂岩製の粘着のある石材を使用していることから仕上げ用砥石である。四面の使用を有し、断面形は四角形。15は、桂化木を石材とした砥石で、上下2面の使用が認められる。

# 図 版



1. 比恵遺跡群第47次調査区東側（東から）



2. 比恵遺跡群第47次調査区東側（西から）

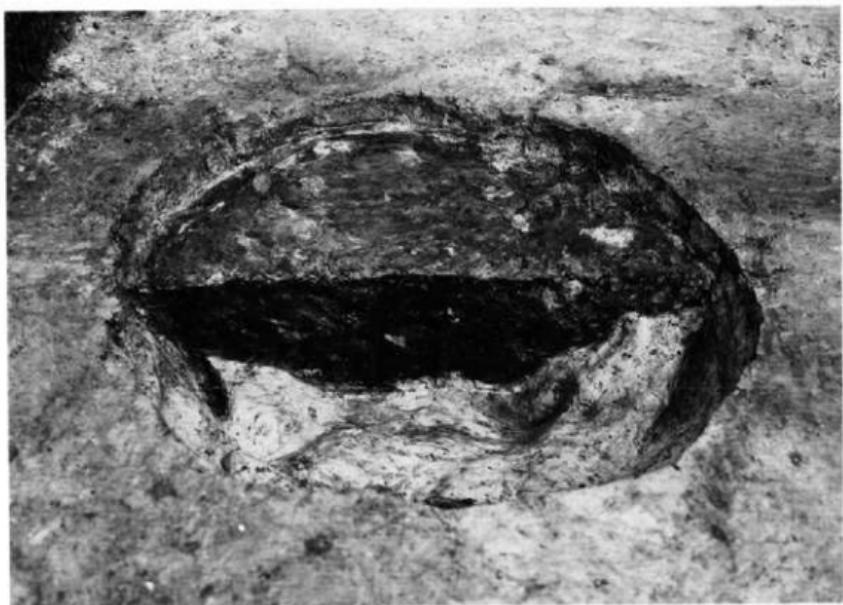
図版2



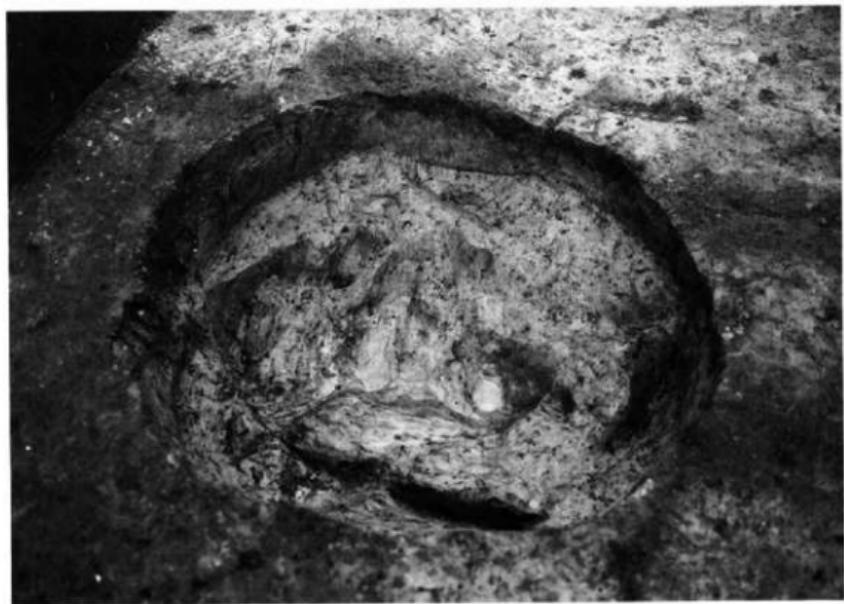
1. 比恵遺跡群第47次調査区西側（東から）



2. 比恵遺跡群第47次調査区北西側（西から）



1. SK02 土壌土層（西から）



2. SK02 土壌（西から）

図版 4



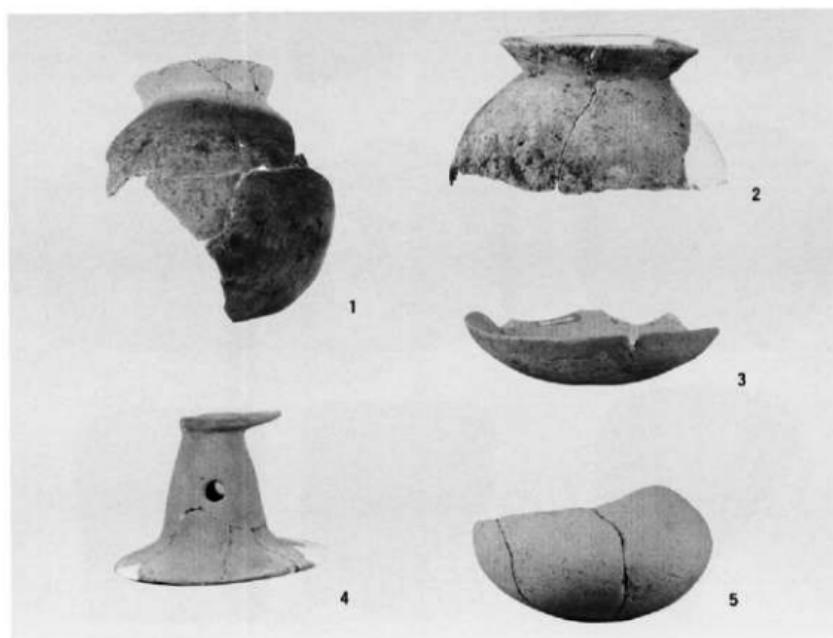
1. SK01 土壌土層（西から）



2. SK01 土層（西から）

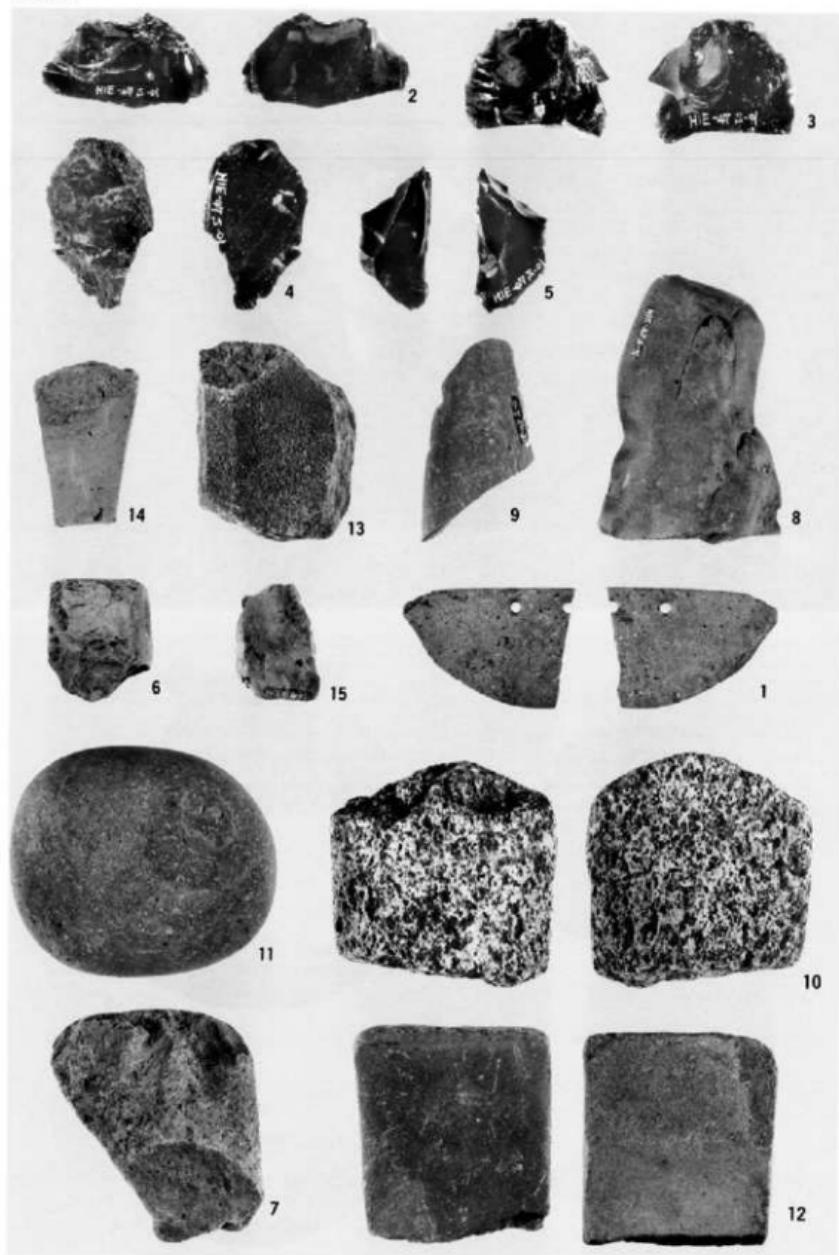


1. SK03 土壠土器出土状況 (南から)



2. 出土土器

圖版 6



出土石器

---

## 比恵遺跡群(14)

—比恵遺跡群第47次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第369集

1994年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 久野印刷株式会社

---

